Ⅳ－47

藩政時代の六郷・七郷堀形成過程に関する研究

東北大学工学部　正会員 ○小林眞勝
東北大学工学部　正会員　稲村　肇

１．背景と目的

仙台市の西部を流れる広瀬川があり、その南東に旧愛宕橋がある。この橋から左岸を260m程下った所に堰が見える。この堰から六郷堀・七郷堀が流下している。藩政時代には清水が流れる情緒ある水辺空間を形成していた。現在はその面影も薄れ、市民との関わりも希薄である。

仙台城下町は慶長 6年（1601）から延宝年間（1673-80）に城下町はほぼ完成を見て、絵図には四ッ谷用水・六郷堀・七郷堀が描かれている。各々の灌漑用水から生み出された耕地面積は約3100町歩で石高約8万5千余石[1]であった。

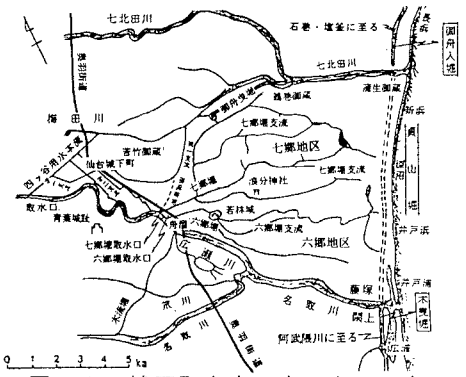
四ッ谷堰用水関係は研究が進められているが六郷堰・七郷堰に関しての研究は少ない。取水口周辺は現在も地名として河原町・舟丁・穀町・南染師町と残るがどんな関係があったのか等。

本研究は仙台三大用水で広瀬川の下流部から取水されていた「六郷堀」「七郷堀」の形成過程を探りそれらに付帯する町並みと取水口（堰場）周辺を考証することを目的とする。

２．城下町形成と六郷堰堀・七郷堰堀

城下町の建設は谷地湿地帯の排水の目的で「孫兵衛堀」を開削し、城下町を主にした「四ッ谷用水」が元和～寛永に開削、城下町の更に外廻りの排水を目的に初期の「七郷堀」が開削された。藩祖政宗がその晩年、仙台城下の南東に若林城（隠居館）を寛永 4～5年(1627-28)に構築し、外堀・内堀も設置。同時に若林城下町が荒町から河原町まで形成されたのである。七郷堀と六郷堀の大規模開削の要因は以下の通り。

それは城下町建設最中に起きた大地震と津波が開府して10年後（慶長16年10月）があり領内で 1,783人水死した。津波は浪分神社（図－１）まで到達し八日間も海水浸しになったと謂われる。被害は甚大でその地域は六郷・七郷地区であった。この二地域はは伊達家統治以前は粟野氏[2]・留守氏[3]・国分氏[4]が治めた所で元々農地が点在しており、一瞬のうちに荒れ地と化した。藩祖政宗は早急に荒地起返開墾奨励を下知している。これを機にして「七郷堀」の大構築が成せれたのでないかと思う。図－１は著者がこうした史実、水路図、現地踏査により作成した。図から見る様に四ッ谷堰・七郷堰・六郷堰の取水場所を示す。若林城廃城と共にこの城下町の活気が失せてしまったが舟溜まりを核とし、若林米蔵・若林材木蔵、そして奥州街道の道筋であったことも幸いして、この界隈は物流町として独自の発展を示し命脈をたもたれた。



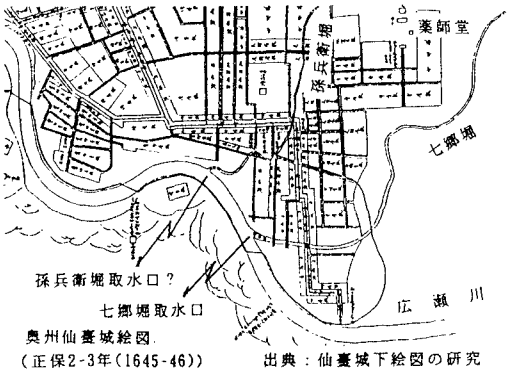
図－１　城下町と水のネットワーク

３．絵図・地図に見る六郷堰堀・七郷堰堀

３－１．六郷堰堀

六郷堰がいつ築造されたかは定かでない。図－３の城下絵図・寛文4年(1664)に用水路として六郷堀が見えるのが初見である。しかし、寛永4-5年(1627-28)に伊達政宗の居城として造営された若林城の堀に当堀が続いていることから、同城造営と関係あることが考えられる。

仙台城下絵図の中で最古絵図（正保2-3年(1645-46)）には、六郷堀は記載されていないが以下の史実によれば既に六郷堀は存在していたのでないかと思われる。この地域は室町初期粟野氏は足利将軍より沖六郷を与えられ領地と成していた。六郷地区（沖野・飯田・日辺・今泉・種次・二木）六ヶ村用水で石高8千960石を潤した。図－４は六郷堀が若林城に通じており、絵図では描かれれていないが城堀を流下した後



図－2　開府から44～45年後頃の絵図

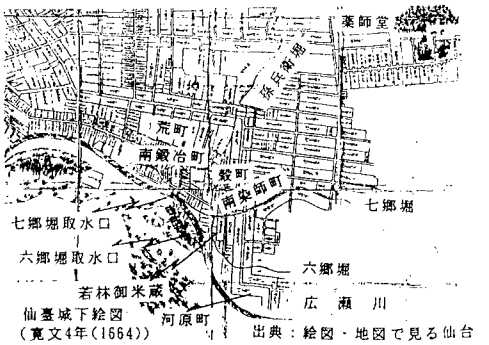
三つ（沖野堀・中堀・日辺堀）に分流し、東南方向に流下し名取川沿いにある村々まで潤した。

3－2．七郷堰堀

七郷堰がいつ設置されたのかは明らかでないが、図－2に用水路として見えることから、城下町建設初期に開削されたものと思われる。七郷堀は七郷地区（霞の目・長喜城・蒲ノ町・伊在・六丁ノ目・荒井・荒浜）の七ヶ村の用水で石高 2万 160石を潤した。図－4で見る様に用水は二つに分流し、一つは薬師堂の北東部方面と一つは東部方面に通じ、両水路ともさらに分流し、太平洋まぎわの村々まで潤し、新田開発と共に用水網が開発されて来た。

4．六郷堀・七郷堀沿いに張り付かれた城下町

図－4は若林城下町の範囲で荒町を初めとして南鍛冶町、穀町、南材木町と続き奥州街道沿いにあり城下の要所として道は枡形にして防衛として、又六郷堀・七郷堀も外郭の役を成していたのでないかと推察される。この町の特徴は職業が町名と成っている。中でも南染師町は伊達藩のお抱え職人として藩の変遷と共に歩んで来た染師達は清流の七郷堀沿いに安住し、染師屋は堀を挟んで店を並べた。両堰の取水口付近は水運拠点地として舟溜を形成し、南部方面からの材木・穀物等を阿武隈川～木曳堀～閖上・藤塚に集積され水路か陸路にて物資を城下に運び込まれた。舟衆は舟丁に居住し、旅人等は舟宿を利用し盛況を呈した。堰場には藩の御米蔵や御材木蔵などが置かれた。若林御米蔵は三間に三十間のもの一棟、三間に二十間のもの五棟が建ててあって一万石の御年貢米が収容された。



図－3　開府から63年後頃の絵図

図－4　開府から185～188年後頃の絵図

6．まとめ

本研究で探り得た事は、絵図により土木事業の時期を判断するが必ずしも城下町建設時期とは合致していないので、史実を参考にして補正する必要があること。取水口である舟溜まりは広瀬川を通じ閖上湊は仙台城下町建設期の仙台藩の外港として活躍し、寛文期に東廻り航路が確立されるまで舟運路として活躍したと考えられること。六郷堀・七郷堀により藩政時代の祖米の生産地でそのために水利争いが絶えなかった。その問題は昭和年代まで続き、「愛宕堰」[3]の設置によりはじめて解消されたこと。

注）1）10町歩＝約112石に換算　2）粟野氏は足利尊氏から当地の一部を拝領（1342-1592）240年間継続。3）4）留守氏・国分氏は文治5年奥州合戦の勝利によって当地の一部拝領　5）「愛宕堰」昭和29年に設置された。取水口は七郷堰でその下流約 60mにあった「六郷堰」を一緒にし、新たに分岐点を設置した。

参考文献）1)「仙臺城下絵図の研究」(1936)阿刀田令造著　2)絵図・地図で見る仙台(1994)高倉淳・外著　3)続「もう一つの広瀬川」(1994) 佐藤昭典著　4)宮城県史(1960)-5　5)宮城県郷土史年表(1972)菊池勝之助著　6)仙台あちらこちら(1982)佐々久著　7)藩政時代に於ける仙台の御米蔵（下）(1937)練生川信次著　8)仙台・水の文化史研究会・資料(1995)荒木茂郎氏